

あい・愛だより

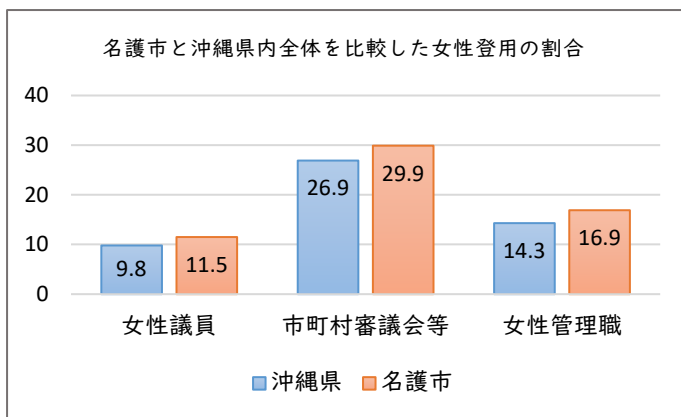
編集・発行 名護市地域経済部地域力推進課
沖縄県名護市港二丁目1番1号
TEL: (0980) 53-5445

39号

名護市の女性登用状況は？

前回のあい・愛だより（38号）では、第2次名護市男女共同参画計画「あい・愛プラン」の進捗状況について、市長へ意見書が提出されたことをお伝えしました。

そこで、名護市では男女共同参画における施策が沖縄県内全体と比べどのくらい進んでいるのかを、沖縄県が調査したデータを基にまとめてみました。



左のグラフは、市町村における女性の登用状況等についてのグラフです。沖縄県内全体の女性登用の割合と、名護市の割合を比較してみました。名護市は、沖縄県内全体の割合と比べ、少し高いことが分かります。

しかし、沖縄県の第5次男女共同参画計画「DEIGOプラン」では、登用目標値を40%と設定しています。まだ、県と市のどちらも到達していません。

また沖縄県では、県内各市町村の男女共同参画施策の進捗を測る指標を作成した上で、市町村ごとに各指標の点数化を行う県独自の調査を実施しています。名護市は41市町村中8位となっています。

A市(首位)と名護市の得点比較													
市町村	(1)男女共同参画に関する条例・計画			(2)市町村における推進体制			(3)政策・方針決定過程における男女共同参画						合計
	①男女共同参画計画の策定の策定	②男女共同参画推進条例の制定	③DV計画の策定	④男女共同参画審議会等の開催	⑤啓発事業の実施	⑥所管課等の設置	⑦議員に占める女性の割合	⑧審議会等における女性の登用率	⑨管理職の女性の登用率	⑩地域活動分野	⑪産業・労働分野	⑫自治会・公民館等	
A市(首位)	20	5	5	10	5	5	2	9	6	5	5	5	82
名護市(8位)	20	5	5	10	5	1	3	11	4	5	0	0	69

上の表は、県内首位のA市の得点と名護市の得点を比較したものになります。大きな差となっているのが、(3)政策・方針決定過程における男女共同参画の項目である⑪産業・労働分野と⑫自治会・公民館等での推進状況となっています。

今後も名護市では「あい・愛プラン」を基に、男女共同参画社会を実現できるように積極的に事業に取り組んでいきます。

性的マイノリティ当事者へのインタビュー

當山 敦己（とうやま あつき）さんプロフィール

宜野湾市出身。高校生の時に性同一性障害であることを自認。その後、名城大学に入学し、大学3年生の時に初めてカミングアウト。2016年に性別適合手術を受け、翌年、戸籍上の性別を変更（女性⇒男性）。広島県へ移住し「ここいろhiroshima」を立上げる。月に一度、セクシャルマイノリティ当事者やその保護者の居場所づくりをしている。また、性の多様性に関する講演会や出張授業などの活動も行っている。



トランスジェンダーである當山さんの生い立ちや、
現在行っている活動についてオンラインでインタビューを行いました。

「自身のセクシャルマイノリティを自認する前はどのような性格でしたか？」

正直、小さい頃は性別に違和感はありませんでした。

基本子どもに干渉しない両親だったので、「女の子らしくしろ」という事もなく、また、小さい時って体格に性差がないので、自分は男だ!っていう感覚を持ちながら生活はしてなかったですね。

なので、男児用の服を着て、髪の毛はお猿さんの様に短かったです(笑)



「自身の性別に違和感を持ったのはいつ頃ですか？」

成長期ですね。体つきが変化してきて胸も出てくる。そして昨日のここのように忘れられないのが、小学校の卒業式2日前に来た生理ですね。

そこで急に「自分の身体じゃない」と感じました。もう衝撃というか…

「小学校で性に関する授業はありましたか？」

ありました。自分も受けました。男女で分かれて。でもその時は他人事だったんです。

「そういうのがあるんだ～」みたいな。だからこそ自分に生理が来たときは言い表せないぐらいの衝撃で。そこから自分の性別に強い違和感を持つようになりました。

「自認してから私生活で困ったことは？」

まず、自認してすぐに嫌と感じたのが制服です。とにかくスカート履きたくなかった。でも、中学生の頃はとにかく周りの目も気になる時期だったので、スカートが嫌だという理由で体操着で登校する勇気もない。せめてもの抵抗で、制服の上からジャージを羽織って3年間過ごしました。

当時はセクシャルマイノリティに関する知識もなかったんで、スカートが嫌だけど、それがなぜなのか説明できず、モヤモヤがずっとありました。

高校2年生の時に会った友人にある日呼び出され、「自分は性同一性障害なんだ。あなたもそうじゃない？」と言われたんです。そこで初めてその言葉を知ったんです。世の中には自分と同じような人がいるんだという安心感を持ちました。

その友人が私を呼び出した理由は「男子の制服を着れるように校長先生に直談判するから、その仲間に入らない？」というお誘いでした。

「当時って今から13、4年前ですよね？」

そうなんです(笑)夏に校長先生に直談判して、その年には男子の制服着用が可能になったんです。すごいですよね。当時なら大きな記事になるようなことかと。でも校長先生は「性に配慮する」というより、「そんな人もいるよね」ぐらいで診断書の提出などもなかったです。なので、アトピーで肌を見せたくないという理由で、男子の制服を着用してる子もいたんです。性に関する事だけではなく、様々な背景を持つ子どもにとっても救いになったと思います。

ここいろhiroshima
ホームページは
こちらから➡➡



「初めてカミングアウトしたのはいつですか？」

初めてカミングアウトしたのは、名桜大学3年生の時、1つ上の先輩でした。

自身の性を自認してから、安心した半面、将来が見えなくなりました。「自分なんて消えてしまえ」と思うぐらい自分を追い詰めていました。でも当時付き合っていた彼女に「私は一人の人として見るのに。あんたが自分を否定したら私はどうしたらいいの？」と怒られたんです。当時は「俺の気持ちも知らないくせに」と思ったけど、冷静になったときに自分がまだ何もしていないことに気付いたんです。誰かにわかってもらおうともせず、誰にも理解してもらえないと自分から壁を作っていたんです。

そこで、一番信頼できる人に話してみようと思い先輩にカミングアウトしました。先輩はいつも肯定的な人で、憧れの先輩でした。話の内容も忘れるぐらい必死に伝えたのだけは覚えています。

すると先輩は普段と同じ感じで「あーぶー（当時の呼び名）、人とちがう部分があるから魅力的なんだよ」「確かに世の中には、攻撃的な人はいるかもしれない。でも俺は何があっても味方だよ」と言ってくれたんです。それまで、「人と違う自分はダメな人間だ」と思い込んでいた私にとって衝撃的で、その言葉で人生が変わりました。そして、先輩が味方なら前に進んでみようと思い、私は一歩踏み出しました。

「ご両親にはいつカミングアウトしましたか？」

実は、両親には性別変更後にカミングアウトしたんです。冒頭で【子どもに干渉しない両親】と話しましたが、親子の会話がないう家庭環境だったんです。そのため、別に話す必要はないと思い、何も伝えないまま性別適合手術や戸籍変更を行いました。

しかし、5年前に広島でセクシャルマイノリティに関する活動を始めてから、私自身の居場所ができました。そうすると、家族に伝えたいという気持ちが出てきたんです。もし否定されても、広島に戻ればいいと思い、2019年6月に沖縄で行った講演会に家族を招待しました。

「ご両親に変化はありましたか？」

講演会で父が泣いていたんです。その時なぜ泣いたのかは聞いていませんが、それから私が載っている新聞記事を取っていてくれたり、「敦己」と改名後の名前を呼んでくれるようになり、私に歩み寄ってくれるようになりました。母も同様で、今では定期的に電話で連絡をくれるようになりました。講演会への招待は、お互いが初めて向き合ういいきっかけになりましたね。

「現在、どのような活動をしていますか？」

現在は、広島県でここひろshimaという団体を立ち上げ、セクシャルマイノリティ当事者の子どもやその保護者の居場所づくりをしています。小学校等への出張授業や講演会なども定期的に行っています。

立ち上げ当時に想像していた以上に団体が成長し、ラジオ番組を持たせてもらったり、タレントさんと対談をしたりと、次々とやりたいことが実現できています。今後はもっと子ども達と関わりを増やせていけたらいいなと思っています。



「最後に、自分の性に悩んでいる方へメッセージはありますか？」

私がずっと伝えているのは、「今いる場所が全てではない」という事です。世の中にはあなたが何をしていなくても傷つけてくる人がいるかもしれませんが、その時は迷わずに、離れるか逃げるという選択をしてください。逃げてもいいんです。

ただ、絶対に自分自身からは逃げずに向き合うことを諦めないでください。自分で自分を見捨てないでください。あなたは一人ではありません。必ずどこかにあなたを理解し、味方でいてくれる人がいます。



自分と向き合うことから
逃げないで欲しい

名護市職員対象のLGBT入門講座を実施しました！

令和4年2月9日(水)、名護市職員対象のLGBT入門講座「LGBT・性の多様性～これだけは知っておきたい！行政に必要な多様な視点～」を実施しました。

講師にNPO法人レインボーハートokinawa理事長の竹内 清文氏をお迎えし、LGBTの基礎知識や行政における多様性の視点についてご講演いただきました。



竹内 清文氏



自身の周りにはLGBT（性的少数派）当事者がいない、又は少ないと感じていても、それは「いない」のではなく「言えない」ということ。誰にも相談できず、65.8%の当事者が自殺を考えたり、自殺未遂を経験するという調査結果もあります。これは非当事者の自殺念慮経験26.8%よりも、約2.5倍の数字です。

また、行政での多様性に関する事例を聞き、普段の何気ない事が多様性の視点で考えてみると、とても差別的になっている部分があるという事に気付かされました。

改めて、1人1人が多様性を理解していくことの大切さを学ぶことが出来ました。



参加者の感想

私の周りでも、昔から様々な性的指向の方がおり接する機会がありました。その方々は、とても楽しく生活していたのであまり問題視をしていなかったなど改めて思いました。まだまだ、子ども達で声を上げられず命を絶つ選択をする現状があることに驚きました。自殺対策の中でも取り組みを考えていきたいと思いました。

とても勉強になりました。特に選挙(投票事務)の件はハッとしました。普段なにげなく行っていることも、様々な人への配慮する気持ちを持って、必要な配慮・対応ができるよう取り組みたいと思います。

氷山の一角で約5%のLGBTの方々がいらっしゃることを知った。誰もが人目を気にせず、自分らしく生きられる社会を作っていくべきだと思いました。今回、知識が深まりました。

LGBTという単語は知っていましたが、「Q」とか「SOJI」という言葉があることを初めて知りました。レインボーフラッグの考え方を理解し、今後の生活に役立てたい。

レインボーハートokinawa
ホームページはこちら



あい♡愛だより
バックナンバー

